

## アイヌ口承文芸にみられるエゾマツとトドマツ

安田 千夏

はじめに

植物はかつてのアイヌの生活においては様々なものを与えてくれる身近な存在であり、神と考えられていた。重要なテーマであるにも関わらず、十分に検討されたとは言いがたい問題が数多く残されている。口承文芸資料にはアイヌの植物に対する信仰が色濃く反映されていると筆者は考えているが、例えばアイヌ語名や利用方法などについて説明された従来の文献資料をみると、口承文芸に描かれた植物の姿が例としてあげられている場合<sup>1)</sup>、どれも断片的な引用であるといわざるを得ない。この点は植物ごとに整理して説明していく必要があるのではないかと筆者は考えている。そしてまた植物の利用と口承文芸資料で神として描かれる植物は密接な関係があると確認できるものの、それとは反対に、有効利用される植物が物語において重要な役割を果たしていない場合があるという点にも注目している。本稿ではこうした問題を考えていく第一歩として、口承文芸資料に登場するマツ科の樹木エゾマ

ツとトドマツを例にとり考えていくことにしたい。この二種はマツ科の樹木の中では一般に馴染みが深く、アイヌの口承文芸にも登場する種である。アイヌの利用法についてのデータをまとめていくと、どちらの樹種も様々な場面において有効活用されてきた樹木であることは間違いない。代表的な用途として、アイヌが冬場の猟において狩小屋を造るときに、常緑の葉をもつこれらの樹木を屋根、壁材として用いたことが知られている。エゾマツの葉は尖っており、肌に触れると痛みを感じるのに対し、トドマツの葉先は二裂して尖らず、全く刺激がないという大きな違いがある。しかし利用面ではどちらも小屋材にしたというデータがあり、どちらかを重視するという偏りはみられなかった。それでは、それ以外の資料と照合したときに果たしてどうかという点について見ていくこととする。

## 一、アイヌ語名について

植物のアイヌ語名についての文献記録を整理していくと、文献

の性格は様々であるが、既に二七〇〇年代から記録されており、その中で名称についてまとまった記述のあるものから、名称が採録された部分について年代順に並べてみた（別表）。その結果から、エゾマツについては北海道では、他の樹種と混同された例がなく、現在に至るまで一貫して *sunku* に近い形で記録されていることがわかる。一方トドマツの北海道アイヌ語名として今一般に知られているのは *hup* であるが、古い記録の中には別の名称が記録されていることがわかる。これをアイヌ語の本来の発音を推定して「*totorop* 類」と仮称することにするが、明治以降のものではトドマツの名称として *totorop* 類がみられたのは服部一九六四のみであった。それに対して、おもに明治以降の文献にデータがみられるハイマツの名称にも *totorop* 類がみられるので、トドマツとハイマツは、名称の面ではしばしば混同される場合があったのではないかと考えた。

そこで筆者は、アイヌ文化においてはまずエゾマツがマツ科の頂点にある存在として意識されており、トドマツは他のマツ科の樹木と共に神格がエゾマツよりは下る存在として認識されており、それが採録名称に反映されたのではないかという

		エゾマツ	トドマツ	ハイマツ
新井一七二〇			トドロフ※	
板倉一七三九	シユンク (松)	トドロツブ (雑木、樅の類)		
松前一七八一		トドロツブ (白樺)		
佐藤一七八六	シユンク (松)	フーツブ (巨木、樅の類)		テウナンフフ、 エヒタツブ (新羅松)
菅江一七九一	シユンク (蝦夷檜木)	フツブ、ト、ロツブ (蝦夷 樅)		
上原一七九二	シユンク (唐松 えぞ松)	トドロツブシラライ フツブ イヒタフシヤリ (樅)		
宮部・神保 一八九二	<i>shungu.sishungu</i>	<i>hup</i>		<i>todonup</i> [沙流、石狩、 十勝 天塩等] <i>henekere</i> [エトロフ等]
宮部・三宅 一九一五	シユング、シユンク 【北海道、樺太】	フツブ【北海道】 ヤユツブ【樺太】		トドヌツブ【北海道】 ヌムニ、ノムニ【樺太】 ヘネツケレ【千島】 ヘネツケレ【樺太】
更科一九四二	シユンク	フツブニ		
知里一九五三	<i>sunku</i> 【北海道、樺 太】 <i>nechrox</i> 【樺太】	<i>hup</i> 【北海道】 <i>up</i> 【斜里】 <i>huxtek.yayux</i> 【樺太】		<i>totonup</i> 【名寄】 <i>kamyuhup</i> 【長方部】 <i>epihap</i> 【屈斜路、美幌】 <i>nomih.yutani</i> 【樺太】
服部 一九六四	<i>sunku</i> 【八雲、幌別、 沙流、帯広、美幌、旭 川、名寄、宗谷、樺太】 <i>hup</i> 【千島】	<i>hup</i> 【八雲、幌別、沙流、帯広、 美幌、旭川、名寄、千島】 <i>tonotorop</i> 【宗谷】 <i>yayuh.pih</i> 【樺太】		

※トドマツを指すかどうかは定かではないが、「葉は楓の如くにして小さく、枝は以て弓材と為す」とある。板倉一七三九では弓材とするイチイと共に「雑木」とされており、両者は当初区別されていなかった可能性がある。以後の文献で「樺」「樅」とあるものはトドマツに同定した。

仮説を立ててみた。

## 二、口承文芸資料について

### 二―一、口承文芸について

ここまでは「口承文芸資料」と大きな括りをしてきたが、様々なジャンルがある中で、本稿では植物が重要な役割を果たす例のある聖伝<sup>(2)</sup>、神謡、散文説話と呼ばれるジャンルにおける両者の描かれ方の違いについて考えていくことにしたい。

こうした問題の先行研究としては、本田一九九七がある。本田は口承文芸資料に登場する(一)人間を救助したり逆に災いをもたらすなどストーリー構成に影響を及ぼす、(二)物語中でセリフを有する、(三)美しい衣装を身にまとうなど風貌が人間に似ているものを人格植物神と呼び、活字化された散文説話や神謡の口承文芸資料の整理を通じて、人格を有するとして描かれる植物にはどのような種の植物があるかという点を明らかにした。本稿ではこの人格植物神という呼び方を引用することにした。

### 二―二、口承文芸資料整理の前提となる点

今後植物についてのデータを整理していくのに際して、次のような点にも留意したい。口承文芸資料においては、植物名は普通一般名称で語られる。例えばヤナギ類は植物学上の分類が多いことで知られており、そのうち利用法の聞き取りでは十種

類程のヤナギ類のアイヌ語名が採録されているが、口承文芸においてヤナギ類は「スス」としてのみ現れている。ハンノキ類、カンバ類<sup>(3)</sup>なども同様に、通常「ケネ」「タツ」という一般名称で語られ、ケヤマハンノキ、ウダイカンバなど種別によるアイヌ語名が現れることはまれである。しかし実際には訳語を付す際に具体的な種別名が付され、データが混乱する一因となっている場合がある。

エゾマツ、トドマツ以外のマツ科の樹木でアイヌ語名、利用法が採録されているものは他にアカエゾマツ、ハイマツ、ゲイマツ、キタゴヨウなどがあるが、口承文芸資料においてはこうした種別名は出現せず、エゾマツ、トドマツの名称の区別のみが認められる。また訳語が「トド松」<sup>(4)</sup>であるのに対し、原文が *sunku* という例がみられたが、前項の別表で見たと通り、トドマツが *sunku* という名称で採録された例は見られなかったため、これは訳語を付す段階で、何かの理由で名称が混乱した例であると考えられた。

### 二―三、口承文芸にみられるエゾマツとトドマツの違い

資料のアイヌ語訳については検証の余地が多分にあるため、本稿でとりあげるデータは基本的にはアイヌ語の原文があり、訳語と樹名が一致している資料を対象とすることにした。また単に「エゾマツ」と一言触れられただけの例、神として扱われているかどうか不明瞭な物語については対象としなかった。

(1) エゾマツが登場する物語

○パターン一 (人格植物神)

木が人格を有し、人の願いに応じて人助けをし、夢の中では人の姿をして現れ会話をする。

(例)

萱野一九九八・第五卷一話・散文説話(5)

△梗概▽

「石狩川の上流の村に父母、ふたりの兄、姉と一緒に暮らしていた娘の話。ある時山で男の赤ん坊を拾い連れて帰るが、家族からはその子は化け物かも知れないから捨てるようにいわれ、従わなかったために家族から孤立する。ある時赤ん坊を連れて家を出し、山の中でエゾマツの根元を家にしてふたりきりで暮らしていた。そこにクマがやって来て命を狙われ、一度は撃退するものの二度目に襲われたときに相打ちになり、娘は死んでしまう。そこにユベツの村に住む、かつて甥っ子が行方不明になったという経緯を持つ若者が通りかかる。エゾマツの家の前で死んでいる娘とそのかたわらにいる男の子を見て、エゾマツの女神にわけを教えてくれるよう祈って眠りについた。すると夢にエゾマツの女神が現れ、今までのいきさつを語ってくれた。悪いクマの神が娘に惚れて、若者の甥っ子をさらって娘のそばに置き、家族から孤立するように仕向け、娘を殺して魂を自分のものにしてしまっていた。エゾマツの女神が娘を守ろうとし

たが繰り返された襲撃のため命を落としてしまったということがわかった。そして若者は娘を生き返らせるための薬をエゾマツの女神から授かり、娘と男の子を連れて自分の村に戻り、家族にわけを話して娘を懸命に介抱し、その甲斐があつて娘は生き返った。悪いクマを罰し、娘は自分の家族と和解してからユベツの若者と結婚した。男の子のお母さんは憔悴して死んでしまっていたので、男の子はそのまま若者と娘が育てたところ、大変親孝行な息子に育った。子孫にはエゾマツの神に必ず祈るように言い聞かせて、幸せに長生きをして死んでいった。」

△本文(関連部分)▽

シーポロ スンク アシ ルウエ ピリカ スンク アシ ヒネ  
アコチセカラ ヒネ チヨロポツケ タ スンク トノマツ  
イイエブンキネ ワ イコレ ヤツ ピリカ シコロ ハワナン  
コロ アコチセカラ ヒネ オロ タ アナン ワ  
siporo sunku as ruwe pirka sunku as hine a=kocisekar hine  
corpokke ta sunku tonomat i=epunkine wa i=kore yak  
pirka sekor hawan=an kor a=kocisekar hine oro ta an=an  
wa

立ち姿の美しい太いエゾマツの根元を囲い、家になりました。エゾマツの女神よ、私ども二人をお守りください、とお願いをしながら家を作り、そこで暮らしてはじめました。

(中略)

オラーノ オカアン アイネ アペ ヘコテ ヤイホクシテア  
 ン ル ネ アクス モコロアナアン ヒネ アクス ネア  
 スンク キタイ ワ ソレクス カムイ ネ クス コラチ  
 アン ポンメノコ ラン ヒネ エネ ハワナクス  
 orano oka=an ayne ape hekote vyahokuste=an ru ne akusu  
 nokor=an aan hine akusu nea sunku kiay wa sorekusu  
 kamuy ne kusu koraci an pon menoko ran hine ene  
 hawan akusu

そう言いながら私は、火の側でごろっと横になり眠っ  
 てしまったのです。すると、エゾマツの上から神なの  
 で神らしい女神が下りて来て

(中略)

スンク トノマツ アユプタリヒ アヘコテ ニシバ ノミ  
 ワ イセレマツウシ ワ ネクニ アラム  
 sunku tonomat a=yuputarahi a=hekote nispa nomi wa  
 i=sermak us wa ne kuni a=ramu

エゾマツの女神へ私の兄や、私の夫もお礼にイナウを  
 送り、酒を送っているらしく思っています。

○バターンニ(人格仮想)

エゾマツのセリフや意思を示すような人格的な描写はない  
 が、木のほうで相手を選んでいるような精神性が読み取れる。

(例)

久保寺一九七七・聖伝十二／自叙神未詳<sup>(6)</sup>

△梗概▽

「サモロモシリの上手に黄金のエゾマツが天高くそびえ立っ  
 いた。神々が集まって来てその木を伐ろうと試みるが、誰も伐  
 ることができなかった。そこにみすばらしい姿をした老夫婦が  
 やって来た。神々はそれを見てあざ笑っていたが、その老夫婦  
 が錆びた鉋や包丁で伐りつけると、エゾマツは倒れてしまった。  
 老夫婦の正体は、オキクルミとその妹であったので、神々は大  
 変驚いたのであった。」

△本文(関連部分)▽

Samor-moshir	隣国の
moshir-pake ta	国の東に
kane shunku	黄金のエゾ松の
poro shunku	大いなるエゾ松
kanto kotor	天際に
ko-tap riki-kur (ko	梢高く
-kitai riki-kur)	
-pumpa kane	そそり立ちて
oka hike	あたりけり、さるを
kamui ko-toise	神々その下に集ひて(伐
shine chaha poka	らんとすれど)
	一枝にても

shine kotpa poka 一かけらにても  
meshu-kur anakne 切り剥きたる者は  
oar<sup>1</sup> isam. 未だなかりき

(中略)

kane shunku 黄金の蝦夷松  
ko-tam<sup>1</sup> esuye awa, に向かつて切りつけたれば  
oat tui-tektek. すっかり切り付されて  
しまひけり。

kane shunku 黄金の蝦夷松は  
samor-moshir 隣国の  
moshir kurkashi 国土の上に  
ko-ar<sup>1</sup> enpuina. 打ち倒れぬ。

○パターン三(神的素材)

木の人格は描かれず、鳥の神がその木にとまる、営巢するなど、神のシンボルのな舞台装置として描かれる。エゾマツに留まる鳥の神は空想上の鳥、または実在の鳥である場合は非常に位が高い神とされる猛禽類である。

(例一)

久保寺一九七七・神謡五十八／自叙神 kesorap (空想上の鳥)  
△本文(関連部分) √

pet<sup>1</sup> etok-ushpe 水源に聳ゆる山

(例二)

kamui nupuri 神のみ岳の  
nupuri shup-tom 岳の中腹に  
o-ush shunku 生ひ出でし蝦夷松の  
shunku shuptom 蝦夷松の幹の程に  
ranke tekehe 下枝を  
a-am-kosaye, 我が爪にひつかけ  
shunku shuptom 蝦夷松の幹の程に  
a-eh<sup>1</sup> or-ko-pashte 止まりてあり  
moshir so kurka 国原の上を  
a-shik-kushpare 見はるかす  
inkar<sup>1</sup> an ruwe 我が見る様は  
ene okahi; かくありき。

久保寺一九七七・神謡六十四／自叙神 <sup>三三三</sup> (空想上の鳥)  
△本文(関連部分) √

kane shunku 黄金の蝦夷松の  
shunku kurka 蝦夷松の上に  
a-yai-ewakte 棲んで  
an<sup>1</sup> ampe ne. いたのであった  
tampe kusu その理由は  
nea shunku その蝦夷松  
kane shunku 黄金の蝦夷松は

a-yai-furare	私と一緒に
ran-an katu	持って来て(空の国から 降る時に)
Kaikai-ush to	漣沼の
to pakehe	沼の上手に
kane shunku	その黄金の蝦夷松を
a-o-ushi-kar	植えて
shunku kitai	その梢に
a-yai-ewakte wa	私が棲んで
an-an ruwe.	いたのである。

また「神のシンボリックな舞台装置」としてまとめることのできる例には次のような物語もあった。

△本文(関連部分)▽	
久保寺一九七七・聖伝五／自叙神 aeoyna kamuy <sup>(8)</sup>	台地の上に
ninar so-kurka	生ふる蝦夷松
o-ush shunku	天高く
chi-e-kanto or	立ちそびえ
shoipa kane	たる一本の蝦夷松ありて
oka shunku	その蝦夷松の梢に
shunku kitai	神工の鏡
kamui hayokpe	

kamui-ranke-tam	神授の佩刀
kapape kasa	薄手造りの陣笠
ko-ar-u (w) eun	一揃ひ
a-uko-shina wa	一緒にしぼりて
shunku kitai	蝦夷松の梢に
a-ko-shina kane	結はへ付けられて
oka ruwe-ne.	ありけり。

エゾマツの話で、樹木の外見に関する描写には「天にも届くような(黄金の)巨木」という要素がいくつかの例において共通していた。

## (2) トドマツが登場する物語

トドマツに関しては、エゾマツとはだいぶ様相が異なっている。まずトドマツが登場する物語自体が少なく、またエゾマツで見たような神との関係が想定されるような物語の採録例はなく、次のような日本語に訳された物語が参考ができるのみであった。

工藤一九二六(伝承地域・十勝地方)  
更科一九六三(伝承地域・胆振地方)  
△あらずじ▽

「クモがトドマツに化け、獲物を待っていた。やがて神々がトドマツを利用して仮小屋を作り、酒盛りをはじめた。そして

神々が寝静まると、クモは手を縮めて神々を捕獲した。風の神と小さな神々だけが逃げて生き延びた」

おわりに

冒頭に触れた通り、アイヌのかつての生活と植物の関わりは深く、特に樹木は個体そのものが神であり、散文説話の中では人間である主人公を助け、その家系は代々その木を重要な神として祀ることになったという物語があるなかで、その木が往々にして巨木であるという点に筆者は着目してきた。今回エゾマツ、トドマツのデータを整理する作業では、エゾマツに関しては確かに巨木であることが重要な要素となっている例が多く採録されていることが確認できた。その木が黄金であるという要素については、他の樹木説話を概観すると、樺太に黄金のヤチダモとして語られた例<sup>9)</sup>があるが、巨木に必ず付加する要素というわけではなく、限られた樹種において認められるものであった。トドマツに関しては、自然界にある姿はエゾマツとの違いがさほど認められないにも関わらず、神としての位置づけはかなり違うものであると考えられた。アイヌ文化における樹木の神格について考える際の重要な手がかりとなることも視野に入れ、エゾマツとトドマツの間に神格の差が生じた理由の究明を、今後の課題としたい。

注

- (1) 知里一九五三エゾヨモギ、ハルニレ、ミヤマハンノキの項など。
- (2) 聖伝をジャンルとして立てるかどうかについては議論があるところだが、本稿ではひとつのジャンルとして扱った。
- (3) シラカンバはアイヌ語名で語られた例がある。
- (4) 早稲田大学語学教育研究所一九八八
- (5) 萱野一九八八にも日本語訳が採録されている。
- (6) アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブス三四七〇五Aに類話がある。
- (7) ここにあげた例以外にも、久保寺一九七七の神話六十五、萱野一九八八、北海道教育委員会一九九四第六話、萱野一九九八第二卷三話、第三卷二話などに同パターンに属する話が記載されており、他のパターンに比べると際立つて多くの採録例がある。エゾマツの話全体を通してみると、胆振日高地方で採録されたものが多かった。
- (8) *aeoyna kamuy* は「始祖神」「人文神」などと訳され、動植物などの姿ではなく人間の姿をしている。
- (9) 知里一九四四、日本語訳のみ。注釈に「原語『ペンニ』とある。知里によると *penni* は北海道、樺太どちらでもヤチダモの名称であるとのこと。

引用・参考文献

- 新井白石『蝦夷志』一七二〇（『蝦夷・千島古文書集成第一巻』一九八五 教育出版センター）
- 板倉源次郎『蝦夷随筆』一七三九（『蝦夷・千島古文書集成第一巻』一九八五 教育出版センター）
- 松前広長『松前志』一七八一（『蝦夷・千島古文書集成第一巻』一九八五 教育出版センター）
- 佐藤玄六郎『蝦夷拾遺』一七八六（『北門叢書第一冊』一九四三 北光書房）
- 菅江真澄『えぞのてぶり』一七九一（『菅江真澄遊覧記二』一九六六 平凡社）
- 上原熊次郎『蝦夷方言藻汐草』一七九二（一九六九 弘南堂書店）
- 宮部金吾『北海道植物志』『北海道志 卷三十四』一八八四 大蔵省
- 宮部金吾・神保小虎『アイヌ』ト日本語対照北海道植物名一班『植物学雑誌』六・六十一 一八九二
- 宮部金吾・三宅勉『樺太植物調査概報』一九〇七 樺太庁
- 宮部金吾・三宅勉『樺太植物誌』一九一五 樺太庁
- 工藤梅次郎『アイヌ民話』一九二六 工藤書店
- 更科源蔵『コタン生物記』北方叢書第三号 一九四二 北方出版社
- 知里真志保『樺太アイヌの説話（一）』『樺太庁博物館彙報第三巻第一号』一九四四（『知里真志保著作集第一巻』一九七三 所収）
- 知里真志保『分類アイヌ語辞典 植物編』一九五三 日本常民文化研究所
- 服部四郎『アイヌ語方言辞典』一九六四 岩波書店
- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』一九七七 岩波書店
- B・ピウスツキ『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料三』『創造の世界』第四十八号 一九八三
- B・ピウスツキ『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料十』『創造の世界』第五十五号 一九八五
- B・ピウスツキ『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料十三』『創造の世界』第五十八号 一九八六
- 早稲田大学語学教育研究所編『アイヌ語音声資料五』一九八八
- 萱野茂『カムイユカラと昔話』一九八八 小学館
- 北海道教育委員会『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ七 オイナ（神々の物語）三』一九九四
- 本田優子『アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について』『北海道アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第三号 北海道立アイヌ民族文化研究センター 一九九七
- 萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』第一巻、第二巻、第三巻、第五巻 一九九八 平凡社
- （やすだ・ちか／白老アイヌ語教室講師）